

文教常任委員会県内調査報告書

平成29年9月5日（火）

1 調査の概要

- (1) 調査箇所 茅ヶ崎高等学校、茅ヶ崎西浜高等学校及び金沢文庫
- (2) 出席委員 岸部委員長、渡辺(紀)副委員長、
武田、内田、いそもと、国吉、いとう、山口(ゆ)、たきた、
佐々木(正)、菅原の各委員
- (3) 調査日 平成29年9月5日(火)

2 茅ヶ崎高等学校

(1) 調査目的

茅ヶ崎高等学校は、平成28年度から始まった県立高校改革において、知的障害のある生徒が高校教育を受ける機会を拡大するため、インクルーシブ教育実践推進校のパイロット校として指定された。障害のある生徒もない生徒も、共に学ぶことを通じて相互理解を深め、多様性の受容力・社会性・思いやりの心を育み、全ての人が地域で豊かに暮らすことができる、将来の共生社会の担い手を育てていくといった、インクルーシブ教育の推進を目標としている。

そこで、当校の取組を調査することにより、特別支援教育に関する委員会審査の参考に資する。

(2) 主な説明項目

ア インクルーシブ教育

パイロット校として、知的障害のある生徒を地域との連携の中で受け入れ、インクルーシブ教育を進めている。

イ 連携募集による入学者選抜の実施

募集定員を21名として、茅ヶ崎市立、寒川町立の中学校計16校を対象に、療育手帳判定基準B2に該当する程度の知的障害がある、若しくは連携中学校校長の推薦がある等の志願資格を満たした入学希望者を面接により選抜している。

ウ 教育課程の工夫

ティームティーチングによる学習、リソースルームの活用、視覚的支援、個人内評価を活用した個別教育計画に基づく学習評価、学校設定教科・科目の設定など、知的障害のある生徒への対応について工夫を行っている。

(3) 主な質疑応答

質 疑 1年次のクラスが8クラスあり、そのうち連携募集の生徒が8名いて、1クラス1名ではなく、2クラスだけ2名いて、全部で6クラスに連携募集の生徒がいるということだが、連携募集の生徒がいるクラスといないクラスで何か明確な違いがあれば、教えてほしい。

応 答 初めての受入れということで、3月の説明会にて、その時点で入学する方に来ていただき、保護者の方、生徒の方から学校生活に対してどんなことを望まれるのか、あるいは、どういったことを期待しているのかを、それぞれ8名の生徒から聞き取りをした。その中で、たとえば連携で入ったことを周りに知られたくない生徒もいるし、自分は困るから周りの生徒に助けてほしいといった希望をして

いる生徒もいた。40人のクラスに1人で入った方がやりやすいのか、複数いてお互いに助け合うのがやりやすいのか、生徒によって違いがある。最初は1クラス1人という考えもあったが、2人一緒に居た方がいいという生徒もいたので、そういった生徒を2人にして、1人の方がやりやすい、あるいは知られたくないから自分は1人にしてほしいという生徒は1人にした。

質 疑 連携募集の生徒がいるクラスといないクラスで、明確な違いというものは出てきたか。

応 答 今現在では、特に違いはないと思っている。どのクラスにいるかは、見ても分からないといった状況になっており、生徒たちも自分たちのクラスにいる、いないといった発想はないと思う。そのほかのクラスでチームティーチングを行っており、連携募集の生徒がいてもいなくても、朝と帰りのホームルームでも2人という形でやっている。いる、いないに関わらず、同じ支援体制をとっているので、生徒たちはいる、いないという意識はしていないし、授業においても差はないと理解している。

質 疑 1学期が終わった中で、連携募集で入られた生徒の学力の問題点、たとえば3月に進級するとなった際、必要な単位がとれていないとなった場合はどうなるのか。

応 答 通常は、一定の基準の中で成績を付けるが、連携入学の生徒に関しては、それぞれ個別に一人一人に向けた教育計画、あなたはここを頑張りましょうといった個別の計画がある。その個別の計画に基づいて達成できれば、進級、卒業に関しては心配のない状況にするという形でやっている。

そうは言っても、実際の授業の中で、特に英語、数学に関しては、学力差がどうしても大きくなりがちなので、全員ではないが、8名のうち3～4名ぐらいは、授業中にリソースルームに移動して、今やっているところに関連する内容の個別の課題を行うという形で、個別の授業を行っている生徒もいる。個別の計画の達成ができれば、成績的には5段階であるので、2以上の評価になる。

入学前の段階で、そこを一番保護者、生徒に心配されるが、自分が前向きに取り組んで、授業に参加してもらおう、出席してもらおうことができれば一切心配はない。

質 疑 リソースルームで教えている先生が熱心にやっていると聞いたが、個別の相談はものすごく有効ではないかと思う。今後、教員を目指している若い方達を増やしていくことは考えられているのか。

応 答 サポートティーチャーという、要するに子供たちにしっかり寄り添って、支えていくための教員がいる。今この取組をスタートして、1学期が終わって2学期にようやく入ったところだが、これまでも支援の必要な子供たちが既にいる。また、これから時間が進むごとに、いろいろな課題が出てきて当たり前と考えているので、そのような場面にしっかりと対応できるよう、柔軟に対応する。

来年、再来年には3学年そろうので、その子供たちの状況をしっかり見させてもらいながら、柔軟な対応ができるように考えている。

質 疑 入学者選抜の方法、考え方について、募集人数は21名だったが、応募総数はどの程度の人数だったのか。

また、連携中学校からの推薦で、B2に該当する程度の知的障害等とあるが、具体的に選抜する基準は誰が決めるのか。

応 答 入学者選抜定員に関しては、まずは県教育委員会の方が主体となって、制度を固める。学校については、その方針に沿って、選抜を実施する形となっている。志願者であるが、昨年度入試においては、これは入学生徒と同数である。8名志願して、8名が合格、入学した状況となっている。

(※ 上記以外の質疑は、校内見学中に随時行われた。)



(4) 調査結果

茅ヶ崎高等学校は、障害のある生徒もない生徒も、共に学ぶことを通じて相互理解を深め、多様性の受容力・社会性・思いやりの心を育み、将来の共生社会の担い手を育てていくために、インクルーシブ教育を推進している。

以上のように、茅ヶ崎高等学校を調査したことにより、今後の施策を審査する上で参考に資することができた。

3 茅ヶ崎西浜高等学校

(1) 調査目的

茅ヶ崎西浜高等学校は、平成28年度よりプログラミング教育研究推進校として指定されており、共通教科情報を中心に、プログラミングを題材とした教材開発と実践を行うとともに、ほかの教科にも普及させ、思考力・判断力・表現力等の育成を通して論理的思考を身に付け、協働して問題解決に取り組むことのできる人材を育成することを目的としている。

そこで、当校の取組を調査することにより、県立高校改革に関する委員会審査の参考に資する。

(2) 主な説明項目

ア プログラミング教育

これまでは、特定のソフトウェアの活用能力を通して情報活用能力の実践力を育成する授業のみに特化されていたが、学習者の意欲をかき立てる工夫がなされていないという問題点があったため、コンピュータを活用し問題を解決する授業から、プログラミングを活用し問題を解決する授業への転化を図った。プログラミングは、生徒の思考力・判断力・表現力を通してアルゴリズム（効率的な問題解決の手順化）を育成するための最適な題材の1つである。

イ 教員の多忙化解消

教員の多忙化解消に向けて、これまでかながわハイスクール人材バンク事業や部活動インストラクター制度等を推進しているが、平成29年度からは、新たに教員以外の者でも対応可能な業務を行う業務アシスタントをパイロット的に配置することにより、教員の業務負担を軽減し、教員が子供たち一人一人と向き合う時間や、教材研究の時間などを確保することを目的としている。

また、業務アシスタント以外にも、ICT活用授業の準備等を目的としたICT支援員の配置、スタディサプリの学習支援等を目的としたサポートティーチャーの配置も行っている。

(3) 主な質疑応答

質 疑 スタディサプリの導入の経緯について、もう少し詳しく伺う。

応 答 2年前まで、入学試験の際の学力差は大変大きなものがあり、どこに焦点を当ててどういう授業すべきか、カリキュラム構成上の高等学校で学ぶべき部分は守らなければならないが、スタート時点が違ってしまふというところがあり、大変苦慮していた。ちょうどそのとき、以前の学校で使っていた職員から提案があり、本校に非常に合致した教材になるのではないかとということで、取り入れる決断をした。

ただ、渡したきりではやらない生徒はやらないので、どのように上手くやらせるかを考え、初年度は毎日放課後に職員が付いて、それぞれにあった内容を掲示して、確認テストをしたり、週末課題として宿題を出したりと、職員が頑張り視聴をさせた。そうすると、やってみると面白い、分からなかったことが分かるといった実体験に基づき、1週間で何十時間も視聴する生徒が出てきた。相変わらず

ずやりたがらない生徒もいたが、そういう生徒には更に宿題を課すようにし、誰がどのくらい視聴したかを手元データで取れるようにして、そうやって定着させていった。

質 疑 プログラミング教育に関する先生方への講習の中で、若い先生とパソコンに親しまれていない世代の先生との認識の違いがあるか。

また、理系の先生と文系の先生との間で理解の違いなどが出くると思うが、その辺の課題などがあれば教えてほしい。

応 答 プログラミング教育であるが、決してパソコンを使ってプログラムを作ることだけが、プログラミング教育ではない。物事を筋道立てて、考えていくことが最大の目標である。思考能力を高めることは、どの教科でも必要である。そのことを全職員に申し上げ、研修会等を行った。年が若いからとか、年をとっているからといった年齢に関しての支障はなかった。

また、第2回のプログラミング研修会報告を御覧いただくと、題材が日本史であった。特に文系でとか理系でとかいう垣根もなく、どんな科目でも理論的に考える能力を高めていきたいと思いますというところで、いろんな教科の科目の先生に参加していただき、どういうところが、自分の科目に通じるのかといったことでやっている。

さらに、第3回のプログラミング研修会では、カップラーメンを作る手順を流れ図にしてみようといったことを行ったりもした。

特に科目にこだわらず、全ての教員が自分の科目で取り入れるよう取り組んでいる。

質 疑 部活動インストラクターの活用の基本的な考え方はあるのか。

応 答 部活動においては、教員全員が何かしらの顧問に就いている。これは、引率の責任であったり、部費の管理であったりという事務的な部分を担っている。

部活動インストラクターをお願いしているのは、本校に専門的な指導ができる職員がいないもの、あるいは部員が多いものであり、基本的には専門性の高い方に部活動インストラクターとして、技術的な指導をお願いしている。

質 疑 部活動インストラクターの活用に関して、様々な行き過ぎた指導などのいろいろと問題になっていることについて、何か指導されていたりするのか。また、教員の負担軽減につながっているのか。

応 答 部活動インストラクターが導入されてから大分たつが、県教育委員会の方で部活動インストラクターに対して、研修会を通して対応している。また、一定の研修を積めば、試合の引率もできるということで、場合によっては、顧問が付き添わないでも引率者として部活動インストラクターの方にやっていただくことができる。

そのため、懸案の事故、行き過ぎた指導、体罰に関しては、もう十分周知しており、その辺りはしっかり認識されて活動していると実感している。

場合によって引率ができる制度は、教員の働き方改革、負担軽減

の観点から、これから益々必要となってくると思う。

(※ 上記以外の質疑は、校内見学中に随時行われた。)



(4) 調査結果

茅ヶ崎西浜高等学校では、プログラミング教育研究推進校として、思考力・判断力・表現力等の育成を通して論理的思考能力を身に付けることを推進している。また、教員多忙化の解消として、業務アシスタント等の非常勤職員を配置することにより、働き方改革の推進を行っている。

以上のように、茅ヶ崎西浜高等学校を調査したことにより、今後の施策を審査する上で参考に資することができた。

4 金沢文庫

(1) 調査目的

金沢文庫は、中世の歴史博物館として、鎌倉時代の武家文化等を今日に伝える貴重な文化財を収集し、その調査研究の成果を展示や講座を通じて公開し、生涯学習の一拠点としてその役割を果たすべく活動を行っている。

そこで、当文庫の取組を調査することにより、生涯学習に関する委員会審査の参考に資する。

(2) 主な説明項目

- ・金沢文庫では、展覧会や講座を年6回程度開催し、文化財の調査・研究の成果を公開している。

- ・平成28年に、2万点を超える称名寺聖教・金沢文庫文書が50年振りに国宝に指定されることとなった。

(3) 主な質疑応答

質疑は現場視察中に随時行われた。



(4) 調査結果

金沢文庫では、国宝等の文化財の調査・研究結果の展示及び講座を実施し、後世に伝える取組を行っている。

以上のように、金沢文庫を調査したことにより、今後の施策を審査する上で参考に資することができた。

<参 考>

1 随 行 者 遠藤主事（議会局議事課）、上西主幹（教育局総務室）

2 調査箇所側出席者

（1）茅ヶ崎高等学校

田代教育局長、折笠教育参事監、田口インクルーシブ教育推進担当部長、大野インクルーシブ教育推進課長、清宮茅ヶ崎高等学校長、大江同副校長、田代同教頭(全日制)、田代同教頭(定時制)、熊沢同事務長、大関同総括教諭

（2）茅ヶ崎西浜高等学校

田代教育局長、折笠教育参事監、田代行政部長、田中指導部長、塩田教職員企画課長、岡野高校教育課長、小林茅ヶ崎西浜高等学校長、牛久保同副校長、笠原同教頭、北村同事務長、勅使河原同総括教諭

（3）金沢文庫

田代教育局長、折笠教育参事監、松井生涯学習部長、堀端生涯学習課長、吉岡金沢文庫副文庫長、西岡同学芸課長、向坂同主任学芸員